
俺らは日陰者刑事？それとも警視庁の地底人？それとも捜査一課の深海魚？

とある物書き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺らは日陰者刑事？それとも警視庁の地底人？それとも捜査一課の深海魚？

【Nコード】

N3393Q

【作者名】

とある物書き

【あらすじ】

警視庁捜査一課13係は地下に部屋を構える怪しい部署。

そこは問題を起こした刑事たちが流される場所。仕事など、ほとんど回って来ない。

それぞれの事情を抱えて13係に「左遷」された5人の刑事たち。相性も微妙な彼らの元に、ある日仕事が舞い込んでくる。しかしそれも雑用仕事で・・・

退屈な一日（前書き）

この小説は奇想天外な推理より、犯人を地道に追い詰める刑事にピントを当てて書いて行きます。

退屈な一日

警視庁捜査一課13係は、設立されてからまだ間もない。

5人の刑事が所属するこの部署は、肩書きこそ立派だが、平たく言えば「1〜12系の雑用を請け負う便利な部署」であり、さらに言うなら「飛ばすならここへどうぞ!」という部署なのである。

そんな部署のメンバーの一人、及川隼人警部。27歳。20代で警部という異例の昇進を遂げた彼も、被告人と銃撃戦の未射殺したとしてこの部署へ。すなわち、左遷。

警視庁ビルの地下7階。日の全く差さない薄暗く狭い部屋は、「地底」とよばれている。

「あーあ、今日も暇ですな」

椅子をくるくる回るしながら不満げにぼやくのは、中島美奈子巡査部長。23歳。

なぜ彼女がこの部署に配属、いや飛ばされたかということ、それは彼女の姉に原因があるらしい。

彼女の姉、中島加奈子は数年前に起きた強姦殺人事件の被害者なのだともっぱらの噂だ。犯人は逮捕されず、事件は実質迷宮入りした。

すなわち被害者妹である中島が発言力を持つことを恐れ、左遷したということなのだろう。

「ホントに暇だよな」

相槌をうっているのは猪俣大輔警部補。25歳。銀縁のメガネといい、きつちり7:3に分けられた髪など、文句のつけどころがない「インテリ刑事」である。もつとも、隼人は猪俣のことを「頭でっかちのボンボン」としか捉えていないが。

「ですよ。なんか事件でも起きないかなあ」

「ちよ、ちよっと中島君」

中島の超不謹慎な発言に待ったをかけたのは金子聡だ。定年後も係長として囑託任命されている。

よく言えば「現役時代の功績を買われて」
正確さ重視でいくなら「断りきれない性格につけ込まれて」というところか。

本当のところは、ここ一年で急激に後退した額から考えていただきたい。

「そうは言っても、いつまでも日陰者なんて悔しいじゃないですか」

甘い。現実が見えていない中島に隼人が口を開きかけた時・・・

「事件が起きていないんじゃないの。上が仕事を回さないだけ。

って事は、私たちは正真正銘、日陰者ね」

隼人のセリフを奪ったのは、青山美咲警部補、27歳。薄く茶の混じった髪を背中まで下ろしている。「男顔」の美貌の持ち主。猪俣なんぞ、彼女にご執心で、自己希望でこの部署にやってきたほど。彼女がこの部署へ配属された理由に関する噂が、これまたどろどろしている。

なんでも、普段はしつかり者で男に対する警戒心も強い彼女が一時無防備になったことがあるらしいのだ。

かなりの美貌の持ち主が、無防備に。当然、男たちはよってたかって関係を結んだ。

しかし、日に日に理性を取り戻す青山を見た彼らはスキャンダル発覚を恐れた。

なぜなら、彼女の父親は警視正。ほとんどの警官の首など、竹のように切り落とす権力は持っている。

どうにかしなくては。

そして男たちは人事部の下っ端を説き伏せ（金銭の受け渡しの際もある）て、今に至ったわけである。

小さな連中だ。

日陰者の彼らに今日も仕事は回って来ず、いつもと同じように遅
屈な一日が終わった。

僕は生きてます

前述したとおり、13係には仕事がないのが普通である。なら普段、彼らは何をしているか？

答えは簡単。遊んでいる。ある時はトランプ、ある時はウノ。ある時は読書……

そして今日、6月12日はウノの日だった。

「じゃあ、猪俣さん。全部で12枚ドロース」

余裕ヅラでいう中島に、ぎりぎりど歯ぎしりする猪俣。

そんな二人を見ながら、美咲は小さくため息をついた。手札はかなり強いが、それでも気分は晴れない。

「正義」に憧れて自分は警視庁に入ったのに、あたしは何をしているんだ。

今の自分たち。「怠慢」「税金の無駄遣い」そう言われても言い逃れはできないだろう。

そのとき、不意に声をかけられた。

「おい、青山？」

自分と同じ年なのに自分より階級が一つ上の及川の、切れ長の目が彼女を見つめた。

「なに？」

美咲はこの男が嫌いだ。顔はかなりストライクなのだが、性格は論外。

もっとも、男は皆嫌いだが。

及川はどことなく嗜虐的な性格を持っていると思う。殺人とかではなく、精神的に。

「お前の番。なにぼんやりしてんだよ？半口開けちゃって」

その揶揄に満ちた質問には答えず、ドローカー드를まとめて出すと、及川はだまりこんだ。

美咲たちがゲームをして時間をせつせと消費していたそのとき、ノックもなしに一人の男が入ってきた。

蛇のような目元が特徴的な彼は、12係長の柳沢警部である。

「！」

その顔を見た瞬間、金子が声にならない悲鳴をあげてウノカードを隠そうとしたが、逆に注意を引き付ける結果となり、失敗。

「何の用ですかあ？」

お流れになったゲームにため息をつきながら、中島が捉えどころのない風のように尋ねる。

柳沢はしばらく、机に覆いかぶさっている老人を凝視していたが、やがて口を開いた。

「上層部から捜査依頼。珍しい事もあるもんだ」そして書類を机の上に投げ、次の瞬間には彼らに背中を向けていた。

明らかかな皮肉を残して部屋を出て行く男を見て、美咲は憤慨した。どこまで、連中は人を小馬鹿にするの？

しんとした部屋に、不意に舌打ちが響いた。及川だ。

「感じ悪い連中。アホかよ。人のこと馬鹿にすることしか知らないなんて、人として惨めだな。見てて笑えてきた」

あんたが言えることかと突っ込みたくなつたが、考えは同じなので黙っておくことにした。

居心地の悪い空気の中、安堵のため息とともに金子が起き上がる。「よかつた。カード持つてかれないで」

あんたは小学生か！美咲は軽いめまいを覚えた。それよりも少し空気を読んでくれ。

「あまりに下手な演技に、そんな気力も失せたのでは？」

「そんなはずはない！」

猪俣の言葉に猛烈に反論する金子に、中島が冷や水を浴びせた。

「じゃあ、あの人は死人に鞭打つようなことはしないんじゃないですか？ だったら、根はいい人ですね」

「ぼく、死んでないよ・・・」

「係長の生死なんか今はどうでもいいでしょ。それより、この事件、久しぶりの殺人っすよ」

何時の間にか手にした書類から顔も上げずにいう及川を見て、金子は目に涙を浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3393q/>

俺らは日陰者刑事？それとも警視庁の地底人？それとも捜査一課の深海魚？

2011年1月26日11時53分発行